

近世前期における『孝養集』板本の伝播とその背景

木村迪子*

はじめに

『孝養集』（三巻三冊）は鎌倉期の成立と言われる伝覚鑿作の仮名法語の一である。本書については室町期の写本に既に「高野山伝法院覚鑿作」との記述があることから、早くから覚鑿作として流布したと言われている¹⁾。それが近代に入って、中野達慧氏により本書が偽書ではないかという左記の提言がなされた。

尤も此の書を今大師の真撰と為さんには、大要左の如き二難ある可し。何となれば本書巻上即ち全集本六〇二頁上段十三行に、

或人カンガエテ一期大要集ト名ツケタリ、其文二曰云々。

とあるが。由来自著に自著を引用する場合は、必ず既述の書たらざるべからざるに。奥書の如く果して天治二年御歳卅一歳の御撰述ならんには、晩年の御作たる一期大要秘密集の文を引き得ざること。尚ほ又自著に対し「或人カンガエテ」とあるも甚だ訝かし、是れ一。次に今大師の所唱の秘密念仏は、既述の如く三密平等の教規に遵ひ、二仏一札・安養都率不二無別と観達して、往生を当処の即身に獲得する玄致を高潮せられたるに。此の書は主として浄土の三経に因拠せる、西方極樂往生を勧めたること、是れ二。斯の如く年次の錯誤と教旨の差違とを考慮せば到底後人の作と見るの外なし²⁾。

これを皮切りに、現在では本書を覚鑿に仮託した偽書と見る向きが殆どであり、筆者もこれに同意する。更に本書が偽書であることがいつから明らかにされていたかについては、伊原照蓮氏が、近世期の目録などを調査した上で、次のように推論された。

以上、江戸時代における、覚鑿上人、乃至密厳院関係の著作全集、或いは著作目録を見てきたが、孝養集はそれらの中には見出せないことを知ることができた。以上によって、孝養集なる著作が覚鑿上人の作として一般にはかなり広く読まれていたが、学僧（専門家）たちは、孝養集を興教大師の作とはみとめていなかった、³⁾ といいうるのであろう。

中野氏の指摘にあるとおり、年次の錯誤、教旨の差違が偽書と見なす根拠であるな

らば、学問が奨励されて宗学が盛んであった近世において、学僧らがその矛盾に頓着しないというのも訝しく、伊原氏の指摘は妥当なものと考えられる。一方で、氏が「覚鑿上人の作として一般にはかなり広く読まれていた」と述べられているとおり、『孝養集』は管見の限り、寛永一九年にもっとも早い板本が出て以来、続々と諸本が刊行されて大衆に流布した。書籍目録には『孝養集』の項に「覚鑿作」という注記が附され、板本にも「高野山伝法院覚鑿作」と内題にしつかりと刻むものが大半である。このように、学僧らの見解と大衆との間における『孝養集』受容のある種の温度差というのは、出版が宗教と緊密に結びつき、数多の仏書が板行され、各々の宗派に御用書林が存在したという事実と照らし合わせると些か不審なように思われる。いったい、この矛盾はどこから生まれたのであろうか。

また、本書は現在、テキストの問題が検討されないまま、その本文が用いられている状態である。元禄七年に婦屋仁兵衛板が出て以降は、管見の限り、その求板本が流通した。本書の翻刻も、そのほぼすべてが元禄七年板を底本とし、更に、『孝養集』の内容についての研究も、概ねこの元禄七年板を底本とした『大日本仏教全書』の翻刻に基づいていると考えられる。他方、本書のテキストについての検討は殆どなされておらず、この元禄七年板を底本にする傾向についても、検証がなされている様子はない。しかしながら、『日本古典文学大辞典』に以下の通り指摘されているように、『孝養集』板本はそれ自体が板本によってかなりの異同を含む。

写本には室町時代末期写の真福寺本（ただし上巻を欠く）、版本には寛永二十年版・元禄七年版などがある。いずれも漢字片仮名交りで、本文は相互に異同が少なくない⁴⁾。

このような指摘があるにもかかわらず、板本の異同についての調査は依然としてな

〔キーワード〕 孝養集／覚鑿／近世前期／書肆／テキスト

*平成二一年度生 比較社会文化学専攻

されていないままである。『孝養集』の板本については右の二つの点が特に大きな問題として現在残っているのではないだろうか。そこで本稿では近世前期に特に注目して、この時代の『孝養集』板本の伝播を探ることで本書テキストの系統を確認し、また伊原氏が指摘するような、学僧らと大衆との間に本書作者に関する理解の差が生まれたことについて、その原因を探ること、本書伝播の背景を説明することの端緒とすることを目的とする。

第一章 板本について

『孝養集』の写本、板本についてはその奥書が『興教大師伝記史料全集』にまとめられている。写本は三種、板本は四種である。今、そのうち板本のみに列記する。

○寛永拾九^{壬辰}曆十月十五日

京下立売通板木屋／八兵衛

○寛永十九^{壬午}曆十月十八日

板元不明

○寛永^{癸未}丑春吉日

三条通菱屋町^ぬ屋／林甚右衛門

○元禄七^{甲戌}歳孟春穀旦

五条橋通松屋町／婦屋仁兵衛⁽⁵⁾

またこれとは別に伊原照蓮氏が、藤井文政堂による求板本の紹介をされている。⁽⁶⁾

しかしながら、右の調査は十分とは言いがたい。そこで、今、私に調査し分類したものを次に記す。列記するに当たってAからDの四系統に分けたが、これは板木の別

に拠るものである。

A-1

寛永一九年刊板木屋八兵衛板

所蔵：同志社大学図書館。(整理番号 一八八・五/K二一〇)

卷数：二卷二冊。中巻を欠くか。

題簽：原題簽。「孝養集卷上(下)」

表紙：原表紙か。楡皮色無地。四ツ目綴。

寸法：二七・六糎×一九・四糎

匡郭：二一・四糎×一七・一糎

刊記：下卷三四丁裏に「右孝養集者以諸本校合訖／願以此功德 平等施一

切／同発菩提心 往生安楽国／寛永拾九^{壬辰}曆十月十五日／京下立売通板木屋／八兵衛」。

A-2

元禄七年刊婦屋仁兵衛補刻修訂板

所蔵：大正大学附属図書館。(整理番号 一五三三／七七／三一〜三)

卷数：三卷三冊。

題簽：原題簽。「^(大講)孝養集」(巻数表記なし。)

表紙：原表紙。縹色無地。四ツ目綴。

寸法：二六・一糎×一八・九糎

匡郭：二一・三糎×一七・四糎

刊記：下卷三四丁裏に「右孝養集者以諸本校合訖／元禄七^{甲戌}歳孟春穀旦／

五条橋通松屋町／婦屋仁兵衛寿梓」

A-3

刊年不明永田調兵衛求板

所蔵：津図書館橋本文庫。(整理番号 【上】一八・四／二五【中・下】

一五・二九六 橋五一七九)

卷数：三卷三冊。

題簽：原題簽。「覺鑊大師孝養集 上(中、下)」

表紙：原表紙。縹色無地。四ツ目綴。

寸法：二六・〇糎×一八・五糎

匡郭：二一・三糎×一七・二糎

刊記：下卷三四丁裏に「右孝養集者以諸本校合訖／元禄七^{甲戌}歳孟春穀旦／

五条橋通松屋町／婦屋仁兵衛寿梓」。

補記：下卷末に「皇都書林文昌堂増版目録」が附されている。板元は「花

屋町西洞院西入町／永田調兵衛」。

B

寛永一九年刊板元不明板

所蔵：成田山仏教図書館。(整理番号 一／四／三五)

卷数：三卷合一冊。

題簽：なし。

表紙：替表紙。

寸法：二七・五糎×二六・〇糎

匡郭：二一・五糎×一八・〇糎

刊記：一二一丁裏に「河上太子転法輪寺法蔵納置之者也／施主 肥前国

C-1 佐賀郡 永海／寛永十九曆十月十八日願主 良永。

寛永二〇年刊林甚右衛門板
所蔵：京都大学附属図書館。

卷数：三卷三冊。

題簽：原題簽か。「孝養集 壹(貳、参止)」

表紙：原表紙。檜皮色無地。五ツ目綴。

寸法：二七・八糎×一九・〇糎。

匡郭：二一・二糎×一五・九糎。

刊記：卷下三五丁裏に「寛永秘孟春吉日／三条通菱屋町ぬ屋／林甚右衛門」。

C-2 刊年不明婦屋仁兵衛後印本

所蔵：龍谷大学図書館。(整理番号 〇二四・九三／一八六―W)

卷数：三卷合一冊。

題簽：なし。直書きで「覚鏝孝養集」。

表紙：原表紙か。丁子色無地。五ツ目綴。

寸法：二六・三糎×一七・三糎。

匡郭：二一・〇糎×一五・八糎。

刊記：下卷三五丁裏の林甚右衛門の刊記を削ってかわりに三五丁表末に婦屋仁兵衛の名前を刻む。

D 寛文九年婦屋仁兵衛板

所蔵：筆者。

卷数：三卷六冊。

題簽：替題簽。白紙に墨書きで「孝養集 卷上(上之下、中、中之下、下)」。

下之下のみ、題簽を欠く。

表紙：原表紙。縹色無地。五ツ目綴。

寸法：二七・〇糎×一七・八糎。

匡郭：二〇・九糎×一六・三糎。

刊記：卷下之下二二丁表末尾に「寛文九年秘七月吉日／ぬ屋／仁兵衛板」。

以上が管見の限りの『孝養集』板本である。データベースや国書総目録などには、いくつか間違いがあった。ひとつは東京国立博物館所蔵の『孝養集』であるが、これは『国書総目録』に寛永三年板とあるが、実際は寛永二〇年の林甚右衛門板であった。ま

図1 筆者蔵平仮名本『孝養集』卷上一丁表

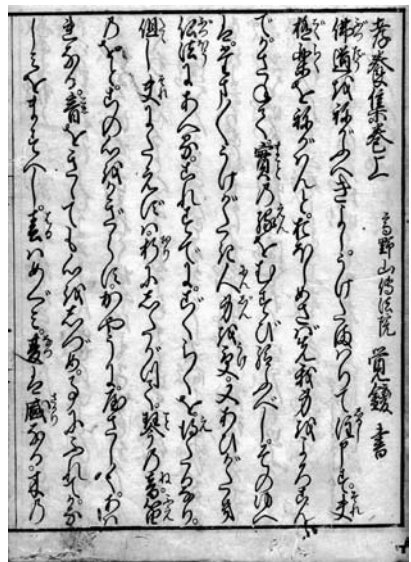
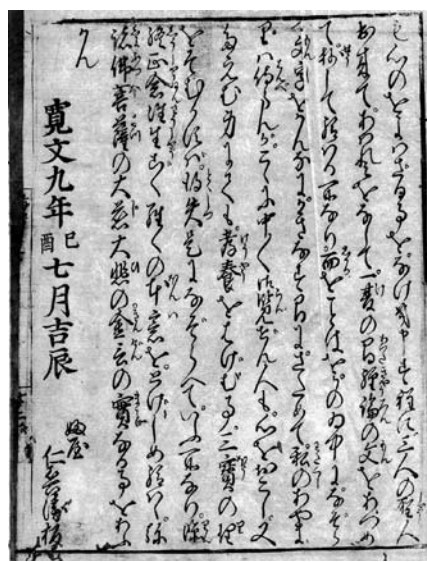


図2 同下巻末 刊記



記の部分の部分を載せておく。

以上の調査を踏まえ、次章では板本の内容について、更に細かく検討していきたい。

第二章 板本『孝養集』のテキストについて

前章では板本の別によって四系統に分類した。これについてよりいっそう検証を加える必要がある。まず、そのテキストの内容である。確認したところ、A系統のテキ

た、ふたつに、和歌山大学紀州文庫本についても、寛永一三年板と目録にあるが、これも、寛永二〇年の林甚右衛門板であった。

Dについては今まで未確認とされていた三卷六冊の平仮名本である。いくつかの書籍目録に記載があり、『日本古典文学大辞典』でも「寛文十年以降の『書籍目録』には六冊の平仮名本または絵入平仮名本が見え、流布した形跡がうかがわれる」と指摘されるところであったが、今回幸いにして現存本を確認することが出来、刊年も寛文九年と明らかにした。参考のために、巻上の一丁表と刊

ストと、B・C・D系統のテキストについて、かなり文章が異なることがわかった。たとえば冒頭の部分については次の通りである。

A一本

仏道ヲ願ベキ様仮名ニ書テ可レ申由承テ人ニ尋註シ申ス也。夫極樂ヲ願ハント思食ハ先我身ヲ悦テ重ネテ実ノ縁ヲ結ビタマフベシ。其故ハ適難受受人身。亦難値佛法。事ハ是既ニ極樂ヲ得ン基ヒナリ。実ニ願ヒ求メザランヤ。其教ハ様様経論ニアリ。但シ其ニタエズハ折ニ随ヒ琴ノ音笛ノ音是ニ不限加様ニヤサシク。哀レヲ催ス声ヲ聞テモ。心ヲ静メハ事ニフレテ哀ヲ増ヘシ。

B本

仏道ヲ願ヘキ由承テ注申ス夫極樂ヲ願ハント思召サハ先我身ヲ悦テ重テ実ノ縁ヲ結ヒ給ヘシ其故ハ適難ニキ受一人身ヲ受又難ニキ遇一佛法ニ遇ル此既ニ極樂ヲ得タル也但シ夫ニタエズハ折ニ随テ琴ノ音笛ノ音ト是心ヲカキラス加様ニヤサシク哀レナル音ヲ聞テモ心ヲ静メ事ニ触テ哀ヲマスヘシ

この箇所だけ見てみると、A系統の方がB系統よりも意味の通る文章になっていることがわかる。また、Aは經典の引用箇所も読み下しておらず——仏書の場合、仏陀のことばである經典の引用は、いくら仮名書きと言えども書き下すことはしないものである——、たしかに下巻末に「諸本校合訖」とあるとおり、そのテキストについては整合性が取られていると言えよう。

更に比較のため、智積院所蔵の書写本を翻刻して次に記す。

仏道ヲ可願様仮名ニ書テ可申由承テ人ニ尋テ注シ申ス夫極樂ヲ願ハント思食ス然ハ先ツ我身ヲ悦ヒテ重テ実ノ縁ヲ結ヒ可給其故ハ適ニ難受ニ受一人身ヲ難ニ値ヒ佛法ニ遇ル是既ニ極樂ヲ得タル也実ニ何ヲカ願ヒ求メザラン其ノ教ハ様々ノ経論ニ有リ但シ夫ニタエズハ折ニ随ヒテ琴ノ音笛ノ音是ニ不限ニ加様ニヤサシク哀レヲ催ス声ヲ聞テモ心ヲシツメ事ニ触レテ哀ヲ可増ス一也

智積院本とA本とを見るに、B本は「仮名ニ書テ」と「実ニ何ヲカ願ヒ求メザラン其ノ教ハ様々ノ経論ニ有リ」の二文が抜けてしまっていると考えられる。このような杜撰な板行が、本文の意味を通じにくくしているのではないだろうか。一方で、BとCについては、板木は明らかに異なるものの、使っている漢字などが細部にわたって一致するため、CはBの板元不明本と同じ底本を用いているか、もしくは、Bを基にして新たにCの板木を彫ったのではないかと推測しうる。以下にそれぞれ一部を掲載する。

図3 成田山仏教図書館所蔵寛永一九年板元不明板

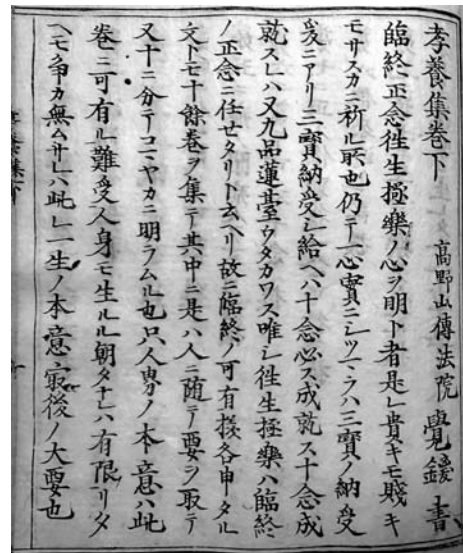
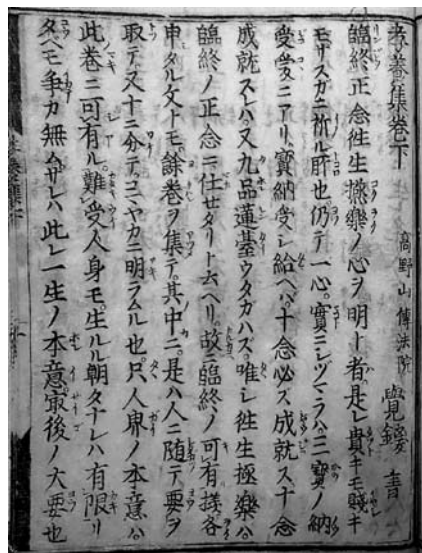


図4 成田山仏教図書館所蔵刊記不明婦屋仁兵衛板



と考えられる。この写真中にも、四行目の「三宝」が、Cでは「宝」となっており、三が抜け落ちてしまっているのが確認できよう。いよいよ杜撰であつて、テキストとしては問題があると言わざるを得まい。しかし、Bの林甚右衛門板は寛永から少なくとも元禄まではかなり流通したのではないかと推測できる。後印本である刊記不明婦屋仁兵衛板も含めると、相当数が現存している。

たとえば、三行目の「肝(トコロ)」という振り仮名は独特で、これはA本では「所」という漢字になっている。また、「云」の漢字についても、書き癖がひじょうに似通つていて、特徴的である。

Bについては奥書から、おそらく覚鑿の記念忌にあわせた私的な板行であつたのだろう。そのため校合に素人らしさが残つていたとも推測できる。底本で抜けがあつたのか、それとも、板木を彫る際に抜けたのかはわからない。しかし、それをそのままテキストに用いたB板については明らかに忽卒であつた印象を受ける。更にC板では、Bを写す際にいくつか誤刻があつた

方で、A-1の板木屋八兵衛板はさほど流通しなかったと思しい。これについては板木屋八兵衛板と、その修訂補刻板である元禄七年婦屋仁兵衛板との比較で明らかになるのではないかと、と思う。

板木屋八兵衛板と元禄七年婦屋仁兵衛板は、匡郭の状態などから恐らく同じ板木と考えられるが、一部に修訂補刻が見られる。同志社大学図書館所蔵本が中巻を欠くと考えられるため、すべてについての検証は困難であるが、少なくとも、巻上の三七丁以下は元禄七年板は板木屋八兵衛板と全く違う板木を用い、その内容にも異同がある。

左にその一部を引く。

A-1

其亦譬バ。アタヒハ。タカクシテ実ノ財ハ得ズシテ。ヨシナキ物ナンドヲ得テ後ニ悔ユガ如シ。其故ハ彼輪王ノ位モ七宝不久。天上ノ衆モ五衰早来ル。是何ンカ浦山敷カラン。況ヤ余ノ人ヲヤ輪王ノ七宝ト者。一ニハ輪宝二ニハ象宝三ニハ馬宝四ニハ珍宝五ニハ女宝六ニハ主蔵臣宝七ニハ主兵宝也皆生滅ノ宝也。然ハ早他念ヲ留メテ実ノ心ニ住シテ我造ル所ノ善根ヲ以テ三宝ノ境界。一切衆生ニ廻向シ奉テ。彼衆生ト共ニ菩提心ヲ発テ。正ク極楽浄土ニ生ント廻向スベキ也。

A-2

其ハ又設ハ直ヒヲハ愚シテ。実ノ宝ヲハ不得シテ無由物ト名ヲエテ。後ニクヤシムカ如シ。其故ハ彼ノ輪王ノ位モ。七宝久シカラス。天上ノ衆モ。五衰早来ル。是何カ浦山シカラン。何況ヤヨノ人ヲヤ。輪王ノ七宝ト者。一ニハ輪宝二ニハ象宝四ニハ珍宝五ニハ女宝六ニハ主蔵臣宝七ニハ主兵宝是皆生滅ノ宝也。然ハ早其思ヲ留テ。実ノ心ニ住シテ。吾造所ノ善根ヲ以テ。三宝ノ境界一切衆生ニ。廻向シ奉テ。彼衆生ト共ニ。菩提心ヲ起シテ。正極楽浄土ニ生ント廻向スヘキ也。

この箇所だけでも、本文が全く異なることがわかるだろう。恐らく三七丁以下の板木に不備があつて新たに板木ごと彫り直さねばならなくなつたと考えられる。それでは元禄七年板の本文はいつたどこから入手したのかというと、全くの同文がC系統に見出せる。これがBを参照したわけではないことは、先に引用した箇所の傍線部から明らかである。

板木屋八兵衛板では七宝について、たしかに七つの宝を列記しているが、婦屋仁兵衛板では「三ニハ馬宝」の部分が抜け落ちてしまつているのが引用からわかる。これ

はCの林甚右衛門板ですでに確認できる誤刻であり、Bの刊記不明板では、このような誤刻はない。先ほどの「三宝」の抜け同様、ここでもC本は誤刻をしてしまつているのである。そしてそのまま、A-2本は誤刻を継承してしまつた。つまり、婦屋仁兵衛板は板木屋八兵衛板を入手したものの、巻上三七丁以下を紛失したか、全く使い物にならなくなつていたことから新たに彫る必要に逼られた。そこで、手元にあつたと考えられるC系統の板本・もしくは板木を参照して、三七丁以下を彫り直したと推測できるのである。そしてこのことから、恐らく婦屋仁兵衛板は板木屋八兵衛板の板木は入手できたが、板本は手元におけなかつたのではないかと、とも考えられる。もし板本が手元があれば、三七丁以下はそれをもとに板木を彫ることもできたであろう。推察するに、元禄七年当時、流通していたのはC系統のみであり、A・Bの両系統は入手したい状況だつたのではないだろうか。

そしてこの元禄七年板の誤刻は、以降、現在に至るまで継承され続けているのである。管見の限り、『大日本仏教全書』、『続浄土宗全書』などの翻刻類に、この誤刻はそのまま見つけられる。

先述の通り、板木屋八兵衛板については同志社大学図書館所蔵本しか現在確認できず、それが中巻を欠くと考えられる状況であるから、現在流通している元禄七年婦屋仁兵衛板のテキストがどこまで適当であるか言い切ることができない。その一方で、元禄七年板の板行状況から、少なくとも寛永二〇年から元禄七年程度までは、A系統のテキストよりむしろ、杜撰なB・C系統のテキストの板本が広く流通していた、否、もしかしたら元禄七年以降も、人口に膾炙していたのはB・C系統の本文だったかも知れない——そう推察される程度に、Cの林甚右衛門板や、婦屋仁兵衛板は現在でも容易に入手・確認することが可能なのである——とすると、近世においての『孝養集』テキストの利用はB・C系統の諸本を用いて確認した方がよいと言ふことになる。これは近世において『孝養集』の影響を考える上では、念頭に置いておかねばならないことである。

第三章 『孝養集』の書肆について

以上、板本『孝養集』のテキストについて確認した。ついで、近世前期の『孝養集』流布において、伊原照蓮氏も指摘する「孝養集なる著作が覚鑿上人の作として一般にはかなり広く読まれていたが、学僧（専門家）たちは、孝養集を興教大師の作とはみ

とめていなかった」という点について、本書の書肆について検証を行いその原因を探りたい。

刊本『孝養集』の板元は、板木屋八兵衛、林甚右衛門、林(婦屋)仁兵衛の三肆が主に挙げられると思う。内、板木屋八兵衛については未詳である。林甚右衛門は婦屋甚右衛門⁹⁾、『増註唐賢絶句三体詩法』(寛永六)から『止観輔行搜要記』(承応三)まで刊本が確認できた。和刻本漢籍から謡本までと幅広い書籍を取り扱った近世初期の大手板元の一であったと言えよう。婦屋仁兵衛については『元禄・正徳板元別出版書総覧』に詳しくまとめられている。これに依れば、

367 ふや仁兵(ふや仁)

婦屋仁兵衛。住所は京都三条通菱屋町(寛文二年刊『つるのさうし』、寛文四年刊『増補以呂波雑韻』、寛文五年刊『二十四孝抄』)、五条通(延宝五年刊『観世流謡本』)、五条橋通松屋町(元禄七年刊『孝養集』)。『板元総覧』に依れば、林氏で、林甚右衛門、林伝左衛門を父祖とする。他に明暦二年刊『かくれ里の物語』、寛文八年刊『真宗肝要儀』、寛文九年刊『草木子』、延宝元年刊『愈愚隨筆』、元禄四年刊『最要鈔』などを刊行している。

とあって、ここでは刊記不明板の婦屋仁兵衛と元禄七年板の婦屋仁兵衛が同一人物であると記されており、筆者もこれに賛同する。しかし引用したように、仁兵衛は林伝左衛門を父祖とする、と『近世書林板元総覧』¹⁰⁾に記されているが、これについては疑問である。

伝左衛門の活動時期はその出版物より、最短でも『大広益会玉簫』(慶安二)から『観音懺摩法』(宝暦五)までと考えられるが、一方、仁兵衛の活動期間は『童子経并抄』(慶安三)から『選択集微考』(元禄二二)と推定できる。両者の活動開始時期はほぼ同じであり、更に活動期間についてはむしろ伝左衛門の方が長いことから、伝左衛門を仁兵衛の父祖と見なすのは困難ではないか。

また、両者の出版物について詳しく見ていくと、どちらも甚右衛門から板木譲渡されて後印本を刊行している。たとえば仁兵衛は『孝養集』以外にも『女訓抄』(寛永一九)を譲渡されて万治元年に後印本を、伝左衛門も『表無表色章』(寛永二〇)を譲られて寛文四年に後印本を刊行している。しかし、刊本を見ると、幅広い分野で出版を手がけた甚右衛門から事業を引き継いだとおぼしい両者は分野の棲み分けを行ったと考えられ、同じ仏書でも、仁兵衛は主に浄土門の仏書——特に浄土真宗の僧

侶・存覚の著書——を刊行しているが、伝左衛門は禅門の仏書を中心に扱っていたらしい、とりわけ近世前期に活躍した曹洞宗僧侶独庵玄光の著作物刊行に深く関わっていたようだ¹¹⁾。

伝左衛門は宝暦頃まで活動を続けるが、仁兵衛は事業がうまくいかなかったのだから、五条橋通にうつった経緯は不明であるが、その頃には刊行に関わった板本の数も著しく減少している。刊記不明板『孝養集』と元禄七年板のそれとで板木が異なるのも移転が影響したか¹²⁾。

今、細かく婦屋仁兵衛についてその活動をたどったが、これは仁兵衛が特に浄土宗・浄土真宗に特化して仏書の出版を行っていたことを指摘したいがためである。仁兵衛は『孝養集』の板元として、甚右衛門から板木を引き継ぎ、更に別の板木を入手してその板行にも努めているが、彼は新義派の御用書林でもなければ、真言宗の仏書を板行していたわけでもない。

近世前期に爆発的に巷間に流布したと考えられる『孝養集』の板元が浄土真宗の関係者であったと言えるのは注目に値する。更に言うところ、管見の限り、甚右衛門も真言宗の仏書板行には関わっていないのであるから、板本『孝養集』流布の初期段階から、板元と新義派との関係は希薄だったと言えるのではなからうか。

なぜ学僧が是認していなかったと考えられている覚鑿作の『孝養集』が流布したか、その答えは、そもそも刊本『孝養集』が新義派の関知しないところで出版されていたからと考えられるのである。

おわりに

以上、『孝養集』の板本とその書肆について検証した。

本書のテキストについては、それ自体に問題があり、『孝養集』を用いた典拠調査などの際には使用する板本について留意が必要であることがわかった。また、書肆についての検討から、『孝養集』は真言宗新義派に深く関わっていた書肆ではなく、むしろ浄土真宗に近い書林から板行されていたこともわかった。伊原照蓮氏の指摘について、その原因が板元の調査から明らかになったと言えよう。なぜ学僧らが懐疑的であった(覚鑿作)が一般に流布したかというところ、その出版自体に他宗派の影響が色濃く反映されていたからだった、と推察できるのである。

また、松崎恵水氏は、『孝養集』と覚鑿の関係について、浄土真宗の僧侶であった

浅井了意の『密厳上人行状記』(寛文一一刊)の記述が最初期であることから、「興教大師覚鑿が親に対する孝養のために『孝養集』を製作したとする説は伝記類において見る限り江戸時代以降に成立した物と考えられる。」⁽¹⁵⁾と述べている。これに随えば、単純に「覚鑿作『孝養集』」の普及だけに留まらず、浅井了意が浄土真宗の僧侶であることも考慮すると、覚鑿伝自体がこの当時、新義派というよりはむしろ真宗の人間が中心になって巷間に流布させていた可能性が指摘できる。

『密厳上人行状記』は寛文一二年の板行であるが、『孝養集』の平仮名本が今回の調査で寛文九年の板行と判明した。平仮名本の登場は『孝養集』に対する需要の高まりをあらわしていると言つて良いのではないか。そして、浄土真宗側のアプローチにもとづく覚鑿伝普及の最大のものが『密厳上人行状記』だったとも言えよう。

別稿⁽¹⁶⁾でも触れたことであるが、平仮名本『孝養集』や『密厳上人行状記』板行頃には、覚鑿縁の寺院ですら、覚鑿伝が廃れていたという記録が現在に残っている。

新義派は覚鑿伝の整理に浄土真宗よりも後れを取ったと思しく、智積院の運徹が覚鑿伝を含む『結網集』を上梓したのは、下ること貞享元年になってであった。その上梓に少なからず『孝養集』流布や『密厳上人行状記』の人氣が影響したのは、学僧ら否定的見解を有していたと考えられる『孝養集』執筆の伝を運徹が『結網集』に取り入れたことから計り知れるのではないだろうか。運徹が『孝養集』を開祖の筆と判断したと考へて問題ないと思うが、彼がそう結論づけた契機の一に板本『孝養集』や『密厳上人行状記』の影響があつたと考へても不自然ではないだろう。

近世における仏書の最大の特徴は出版と宗教とが密に関係を持ち合つたことにある。それにより多くの仏書が板行されたが、そこには宗派間の複雑な相互干渉もあつたと筆者は考へている。『孝養集』の板本伝播も、そのひとつと見なせるだろう。

〔註〕

(1) たとえば宮坂宥勝による『興教大師覚鑿写本集成 第四卷』(法蔵館、一九九七)の解説に、「本書は、今日では覚鑿に仮託された偽書とみられている。が、すでに室町後期頃には高野山伝法院覚鑿作として書写本が流布していたものようである。」

(2) 中野達慧「興教大師御撰述に対する書史学的研究(元)」『密教研究』三六号、一九三〇

(3) 伊原照蓮「運徹僧正と孝養集」(興教大師研究論集編集委員会『興教大師覚鑿研究』(春秋社、一九九二)所収)

(4) 『日本古典文学大辞典 第二卷』(岩波書店、一九八四)に依る。傍線は筆者が施した。

(5) 三浦章夫編『興教大師伝記史料全集』(ヒタカ、一九七七)

(6) 註(3)に依る。

(7) 註(4)に依る。

(8) 翻刻は『興教大師覚鑿写本集成 第四卷』(法蔵館、一九九七)所収の影印にもとづく。

(9) 井上隆明『改訂増補近世書林板元總覧』(青雲堂書店、一九九八)

(10) 市古夏生編『元禄・正徳板元別出版書総覧』(勉誠出版、二〇一四)

(11) 註(9)に依る。

(12) 婦屋仁兵衛による存覚の出版物は以下の通り。

『真宗肝要儀』(寛文八)／『女人往生聞書』(寛文九)／『報恩記』(元禄四)

(13) 婦屋伝左衛門による独庵玄光の出版物は以下の通り。

『蒙山对客』(寛文六)／『孝感編』(延宝五)／『儒釈筆陣』(天和二)／『善哉宝訓』(元禄五)／『独庵独語』(天和三)

／『獨庵独語』(天和三)

(14) 更に言うならば、同じ仏書の出版を手がけていても、古典を中心とした仁兵衛より、当代の禅僧の仏書を扱った伝左衛門の方がこの当時既に時流に合つていたとも考えられる。

(15) 松崎恵水『孝養集』について(日本密教学会事務局『密教学研究』二〇号、一九八八年三月)

(16) 浅井了意『密厳上人行状記』について——典拠・執筆姿勢・影響——(『近世文藝』一〇一号、二〇一五年一月 所収)

(17) 『根来寺文書』(御室西蓮院本)には覚鑿由来の毘沙門天について、次のような奥書がある。「寛文十年五月十八日、和州信貴毘沙門開帳之間、参詣了、鑿上人、住侶之輩粗尋之処、無所知輩者也」(興教大師伝記史料全集 史料編に依る)。信貴山における宝珠伝承は覚鑿伝の魅力の一と考へられるが、寛文一〇年当時は信貴山の住侶さえも、この伝承を知らない者が殆どであつたと記されている。

The Printed Works of KOYO-SHU and Their Impact

KIMURA Michiko

Abstract

"KOYO-SHU" is a book about the discharging of filial duties, reportedly written by KAKUBAN, patriarch of the Shingon sect's New School of Righteousness.

There are four anthologies relating to the printed works of "KOYO-SHU". Furthermore, there are two sets of differing texts for each of these anthologies. Doshisha University is in possession of one of the oldest of the texts printed in 1642. FUYA JINBE acquired the printing blocks for this text and arranged for a reprinting in 1694. This the most important and most often printed of the "KOYO-SHU" texts.

The second oldest text, printed in 1642, is in the Buddhist library at NARITA Shrine. This text is the same as one dated 1643 and printed by HAYASHI JINEMON. From at least 1642 to 1694, the Narita text seems to have been an extremely popular edition.

One of the publishers of "KOYO-SHU" in the early modern period was FUYA JINBE. His father might have been HAYASHI JINEMON. Together they published many books about Buddhism, especially Shin-Buddhism, although they did not publish anything relating to the SHINGON sect. Indeed, it is reported that the Shingon sect considered "KOYO-SHU" to have been apocryphal.

Key words: KOYO-SHU, KAKUBAN, early Edo priod, Publisher, text